

郷土を愛する人々の雑誌

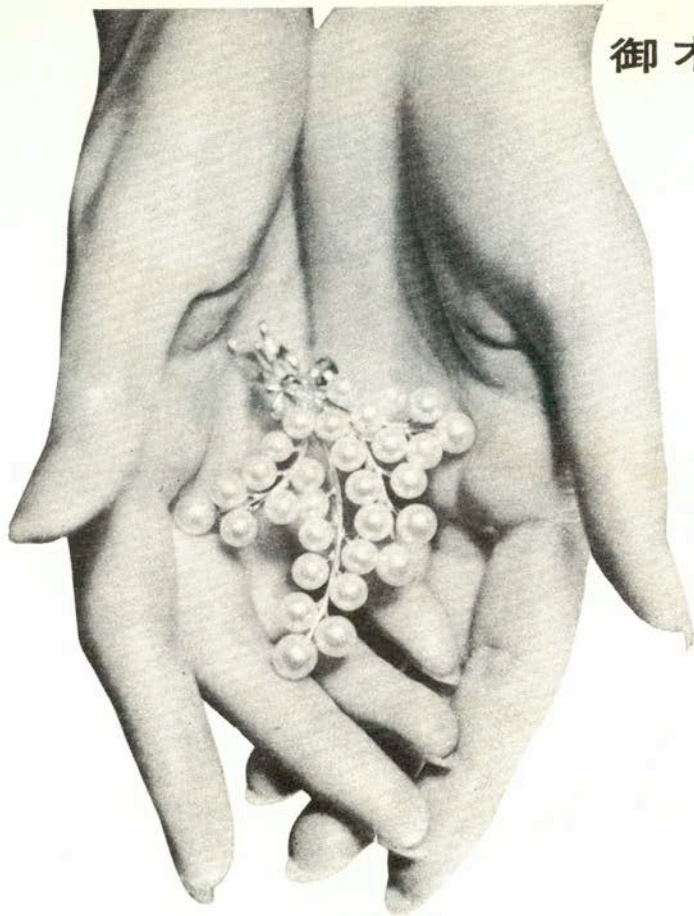
神戸っ子

1962 / 5・6



121013

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO MAY&JUNE 1962 NO.15



御木本真珠店



神戸店—三宮・神戸国際会館内TEL神戸(22) 0 0 6 2
大阪店—堂島・新大阪ビルディング内TEL大阪(361) 7 4 2 9

真珠の代名詞、ミキモト

世界のどこへ行ってもミキモトの名は

真珠を代表する言葉です。

そしてミキモトパールはあこがれと気品のシンボルです。

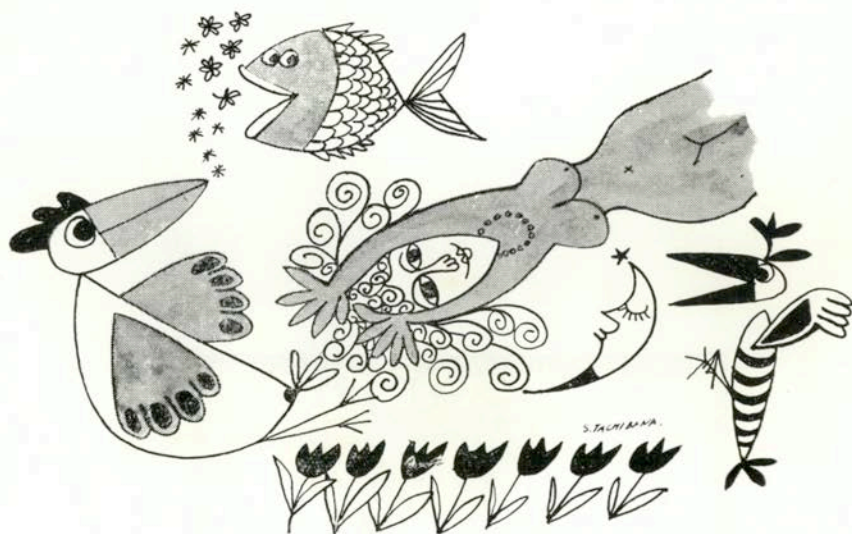
これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





目 次

PHOTO／神戸と女性・ミスドイツ	1	30 座談会／すみよいまちこうべ
れんさい随想⑩／・さようなら 阪本勝	4	36 PINK CORNRE (T)
ずいそう／思い出の中の神戸・葦原邦子	9	39 随想／生田の小野能物語・求塚の巻・香西精
連載／問わず語り③兵庫と神戸・司馬遼太郎	12	40 女性あちらこちら①／香港・鴨居玲
私の好きなスター／市川寿海・田中健一郎	17	43 BONSOIR MADAME
神戸だからえがく夢 No.7・藤本義一	18	44 神戸うまいもの地図
神戸を創るトップグループ／市民毎日登山会	20	48 KOBEEKO SHOPPING GUIDE
花時計・レリーフ／松井高男・伊藤誠	22	52 ショートショート③／メリケン波止場・陳舜臣
戸外で楽しむオシャレ・福富芳美	25	55 読者サロン

表紙／小磯良平・カメラ／杉尾友士郎・米田定蔵・デザイン／橘昭三

れんさい随想⑩／最終回

さようなら

阪 本 勝
え・中 西 勝



お恭というふしぎな女性にめぐりあったのが、身の因果。とうとう、十回書かされた。

これは、お恭という一女性の偉大さであり、勝という一男性の敗北の記録である。

れんさい随筆を終るにあたり、一言ビリオッドを打っておきたい。

むかし中央公論の編集長をしていた滝田栲陰が、村松梢風に原稿

を頼みに行ったとき、窓外を眺めわたしながら、

「ああ、うぐいすが啼いてるなあ……」とためいきついたそうだ。すると梢風は、たんたんと、原稿を書いた。

人間というものは、そんなものなんだ。カタクルシイことを言っていて、みたって、最後のところは、人間と人間との対決になる。ぼくが、お恭に負けたのも、この道理だろう。つまりお恭が大編集長でありオレがアホだったということだ。

◇
故小林一三があるとき、しみじみぼくに言った。

「阪急百貨店は造るよ。しかしデパートなんていうものは本来邪道なんだ。大阪、宝塚をむすぶ土地全体を横のデパートと考えればいいじゃないか」

この一言が多年わたしの脳裏を離れない。大人物だったなあ、といまでもつくづく思う。

ところが、それだけの大見識を持つ小林翁が、正月などに出る会社のビラ、ポスター、新聞の〆新年のあいさつなど、全部自分で書いた。精魂を傾けて書いた。

ここがえらいところなんだ。読者のみなさん方もご存じだろうが毎年正月には、いろいろの名士のいわゆる〆年頭の辞々なるものが新聞に出る。しかしいったい誰があんなもの、読むかってんだ。

秘書課の職員が、苦心して作った一べんの作文である。それが新年の新聞に出ると、まるで、ハエが紙面にたかったような感じで、紙面はまっくろけのけ。誰も読まん。

しかしぼくは、それを自分で書く。読んでもらえるように書く。だから多くの人々が読んでくださるらしい。この道理を知らない人々は、ライスカレーにハエのとまったような文章を毎春新聞に発表される。オカシクテ、オカシクテ、アホラシクテ……見ちゃおれん人間にモノを書かせるということは、容易なことではない。それだけ編集者の力量がモノをいうのだ。

◇
終末なるゆえに、ここにくりかえし物まうす。わたしはコウベに

ほれ、コウベを愛し、神戸を生涯の土地と心得ている。コウベを愛執する思いでは、人後に落ちない。

そのマニアのひとりとして、ここに一言しておきたい。

神戸っ子は、すべからく、商店街をカッポせよ。小林一三の達識を思い浮べてもらいたい。デパートというものは、外国にまず発生し、日本にも出現した。しかし、パリ人はデパートに行くことを恥とし、悠々と商店街を歩くことを誇りとしている。

わたしはデパートにはとんど行ったことがない。わがコウベはデパートの町ではない。デパートは、それはそれとして存在の意味も価値もをみとめるけれども、大港都の家族、アベック、友達などは堂々と商店街をカッポすべきだ。

そんな大都に住んで、どこかのデパートで、うつら、うつらしているようでは、コウベ市民の顔にかかわる、神戸っ子の意気、気性自尊心などというものは、乱れ髪で、商店街の大道をカッポするところにある。デパートでウロチョロしているようなやつは、アフリカのジャングルの奥で、五千万年前の動物と遊んでいるようなものだ。

おたがい百貨店も愛しましょう。その努力にも感謝しましょう。しかし、市民ともあるものは、市を愛してほしい。そしたら、親子相たずさえ、恋人相擁しつつ、堂々と街をあるけ！

くれんさい随筆の最後にあたり、あえて一言するしだいだ。

ああ、コウベよ。ああ、コウベよ。コウベを愛するがゆえに、いささか妄言した。お許しいただきたい、神戸っ子のご発展を心からいのります。おりにふれまた、書かしていただきます。

近作

若草のうえにかそけき風

ありてひそかに去りぬ頬に

ふれつつ



きものさろん
服飾細貨
きものと細貨
新橋店
東京

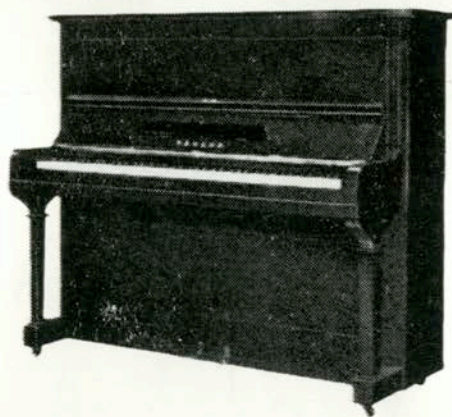
西店
東店
神戸

おんがら屋

神戸・西店 TEL ③ 8836
東京・東店 ③ 0629
東京・新橋店 (571) 0807

美しい音色と正しい音程

ヤマハピアノ



U2

新価格

たて型88鍵 ¥218,000



神戸もともち

日本楽器

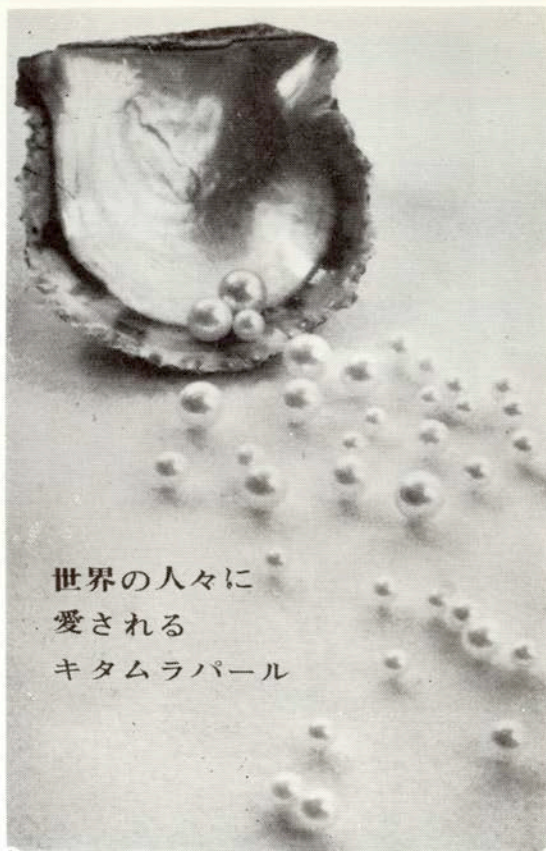
元町通2丁目 TEL ③ 1631-2



オシャレをたのしむ帽子の店

マキシン

トア・ロード TEL③6711〜3



世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村パール

北村眞珠株式會社

神戸／元町2・東京／スキヤ橋センター

TEL③0072 (571) 8032

ずいそう

思い出の中の神戸

葦原邦子

え・松本 宏



神戸はブルーの街、それも淡い……。

神戸はロマンティックな夢をみるにふさわしい街——。

いいとしをして、なお私は神戸をこんな風に想っている。何故だろうか？。

それは多分、幼い頃から、宝塚在団十年のゆめ多い時代を、身近にゆき来した日の思い出がそうさせるのに違いない。

阪神沿線の深江、今は神戸市に属するときいたが、その素朴な村に生まれ育った私にとって、住吉、御影、六甲などは、神戸に到着する迄のなつかしい駅名であり、現在もなお旧い知人の住む土地である。そして、そうした沿線をどんどん走り過ぎる電車に乗って、私はよく神戸に通った。



遊びも、散歩も、買い物も……。

世の中が激しく変貌した今日でも、私の心にすむ神戸は、エキゾチックでハイセンスなブルーと白の街である。

父や兄達とフラリと出かけた宵の元町、宝塚時代、写真撮影に歩いた山手の真昼、波止場の風と海の匂い――。

思い出の糸をたぐれば、なつかしさはつきない神戸のまち。

とはいえ、五、六年前に全く久々に行った神戸は、白状すると悲しいみないな姿だった。元町は昔日の面影もなく、トア・ロードはただ寂しく、山手の教会の壁の崩れ落ちた風景は、あの戦争をくぐりぬけて来た神戸の心を物語るかに思えて辛かった。

それでも「マキシン」という店だったか？扉を押して入った店の中でみつけた美しい花の一杯あふれた帽子の嬉しさや、どこへ行ったのだらうと、あちこちを尋ねたあけく、坂を登る途中みないな所に忽然とあった「ユーハイム」は、やはり神戸だと思つたし、とにかくコーヒーとお菓子を食べながら、いつの間にかすっかり満足していたことを覚えている。

今はあるか無いか、私が知らないのは残念だが、中村やの英ネルというのを、父が好きで、着物を買ってくれるといえ、そこ連れて行かれたものだった。

いわゆるネルとよばれる余り香ばしくない布ではなく、英ネルというのはつまり英国産のゴキゲンな布地で、虫にさえ気をつけていれば何年も変らぬ品だった。いま流に言えば上等のウールの着物である。

中でも昭和七年頃に買ってもらったコゲ茶の濃淡の大柄のチェックは、宝塚生徒のシンボルといわれたみどりの袴にも非常によく合う色調だった。

これを二尺のたもとの長さで着るとなかなか個性的で洒落れていて、毎年セルの季節が来ると愛用していた。

そのうちに東京公演の寄宿舎で着る部屋着になり、結婚して間もなく戦争中の諸物資不足時代、二人の男の子のこよなき衣類となつてみごとに活躍したのだった。

着捨て突き捨て、インスタント盛んな折りから、まことに愉しい思い出だし、今でも手や肌に残るハイカラでさわやかな感触を得難いものと思う。

舞台が忙がしくなると、自分の時間は全くなくなるが、グラフ用の撮影で時々野外に出ることがある。

来週は神戸で、などというプランがたつと、遠足にゆく子供ののうに待ち遠しかった。

陽の光りがきらめく五月、瀟洒な洋館の白い柵のある庭に、大輪のつるバラが惜し気もなく咲いている山手の道。

曲り曲りに登りつつ道の途中でふと立ちどまりふり返ると、眼下に外国船の浮かぶ港が見とおせる。

静かなあたりを時々思いがけなく地上の騒音がひびいて、見まわすと目の前にかげろうがもえる汗ばむようなひるさがり。

私はキラキラ光るはるかな海を眺めて、外国への限らない夢をみるのだった。

一体、あれからどれほどの年月がすぎたのだろう。

二十年、三十年……でも思い出があればこそ、いつでも私は意のままに自分の好きな年代に還ることが出来ることを、本当に素晴らしいと思う。

(TVタレント)



荻原邦子さんのこと

昭和三年宝塚音楽舞踊学校入学以来、同十四年退団するまで、宝塚黄金時代の代表的男役スターとして活躍、その人気は大変なものだった。

その後、服飾美術家の中原淳一氏と結婚現在では四児のママ。テレビの司会、対談などすっかり放送界のタレントとしてその名を売っている。朝日TV「咲子さんちょっと」で物わりのよいお姑さん役で活躍中。日曜画家の会「チャールズ会」会員でもある。神戸東灘区深江出身。

■連載／問わず語り

③

兵庫

と

神戸

司馬遼太郎
え・中 西 勝

兵庫という地名は、すでに律令時代からあらわれているほどにふ
るいが、この地名が諸国のひとの口にしきりとなえられはじめた
のは、大坂夏ノ陣がおわった江戸初期のころだろう。当時、中流以
下の家庭の若い女性のあいだで、

兵庫髷（まげ）

というのが流行した。とくに、遊女のあいだではやり、この髪形
でない者はなかったという。

それ以前の女性の髪型からみれば複雑なもので、やがて島田髷へ
とつづく日本の女性の結髪史は、この兵庫髷から大きくかわったと
いえるかもしれない。

兵庫髷のことばのおこりについては、当時から説説があつたらし
いが、「歴世女装考」というふるい本によると、

「この髷は、摂津国兵庫の遊女より結びはじめたる髷なり」

とある。いまの神戸が、流行の源流であつたわけである。

元禄のころになって、島田髷や勝山髷の流行におされて一時すた
れたが、その後、兵庫髷をアレンジした髪形が考えだされてふたた
び隆盛した。この第二期流行期はもっぱら遊里で、形によって名も
立（たつ）兵庫、結（むすび）兵庫、ウツオ兵庫などとよばれた。
読者はおそらく、時代映画や小説のサシエなどで御記憶があるはず
だが、いずれも、第一期の兵庫髷ほどの高雅さはないが、豪華とい
う点では原型よりもまさっている。

つぎに兵庫ということばが人口に膾炙（かいしや）したのは、幕
末になってこの地に兵庫奉行という役職がおかれたことである。

幕末にこの地が開港場に指定されたため芙蓉（ふよう）の間詰
（まずめ）の旗本が任命された。初代奉行に小笠原摂津守広業とい
う人物が赴任するはずであったが、時の複雑な朝幕関係の事情のた
めに実際の開港がおくれ現実に開港されたのは維新直前であった。

最後の兵庫奉行は江戸から赴任せず、大阪町奉行の柴田日向守剛中
という武士が兼務した。奉行としての役高は千石で、役料は現米に
して六百石を給せられたというから、幕府の地方職としてもわるい



職ではなかったらう。

ところが、維新前には「兵庫」の地名のみがあらわれて「神戸」の地名はほとんどいわれなかったが、ただひとつ、

「神戸海軍操練所」

というのがある。

当時の幕府の海軍奉行であった勝海舟がつくったものである。

これははじめ幕府の官設のものではなく、官費は出ていたものの内容は勝個人の海軍塾のようなもので、汽船の操法を教えた。塾生も旗本御家人といった幕臣ではなく、ほとんど諸国の浪人者ばかりで、その塾頭が、土佐藩脱藩の坂本竜馬であった。

場所は、兵庫の生田の森である。ここに宿所を設けて、塾生を収容した。

塾頭坂本竜馬が、文久三年五月十七日に故郷の姉乙女に送った手紙に、この設立当時の事情がかかれていいる。

「このごろは、天下無二の大軍学者勝麟太郎という大先生の門人となり、ことのほか可愛がられて、客分のような者になっています。

また、近いうちに、大坂から十里ほどはなれた土地に兵庫と申す所あり、ここに海軍を教える施設をこしらえるつもりです。ここで四十間も五十間もある船を作り、弟子ども四五人もあつめるつもりです」(口語訳)

竜馬はこのことがよほどうれしかったらしく、姉への手紙の末尾に、

「エヘンエヘンかしこ」(原文のまま)

と、おどけて書いている。

やがてこの塾が、勝や、竜馬の奔走で幕府の官立になったのは、元治元年五月二十九日である。

この日付で、触令が出ていいる。

「摂州神戸村に操練所おとりたてに相成り候につき」

という文章からはじまるもので、おそらく幕府の公文書に神戸村という地名が出た最初ではなかろうか。

練習生は、諸国から四、五百人もあつたが、このなかでたれでも知っている名をあげると、

坂本竜馬（土佐）

伊東祐亨（薩摩・のちの海軍中將）

伊達小次郎（紀州・のちの陸奥宗光）

などがあるが、ほとんどが過激ないわゆる尊攘の志士で、たとえば塾生望月小弥太（土佐）などは池田屋の変で新選組と闘つて斬死し、安岡金馬（土佐）は蛤御門の変で戦死するなどほとんど政治結社のような色彩をおびてきたため、幕府はほどなく閉鎖してしまつた。慶応元年の三月のことで官制化してから一年もたっていない。

その廃止の政令の文章は、

「摂州神戸村へ、御軍艦操練所御取りたて相成り候につき、有志のめんめん罷り出で、修行致すべき旨、せんだつて相達し候趣きもこれあり候ところ、このたび同操練所は御廃止に相成り候。この段、むきむきへ、よりより達しおかるべく候事」

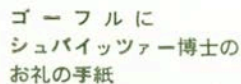
というもので、当時の激動する政治情勢のためについに流産となつた。

私は、こんどの新聞連載に坂本竜馬をかくので、この神戸海軍操練所（神戸海軍所、神戸海軍局などともいう）のことをくわしく知ろうと思つているのだが、なにぶん十分な資料がない。とくに、生田ノ森に、全国（ことに西国方面）から四、五百人もものうるさい浪士があつてきたときの様子や、神戸海軍屋敷の建物（おそらく生田神社の既設の建物を利用したのではないか）の様子も知りたいと思うのだが、どうも思わしい資料にあたらない。

なにしろ神戸という地名が政府機関の名に冠せられた最初の出来ごとだけに、おそらく神戸市でその跡に記念碑でもたてているのだらうと思うのだが、いちど出かけてみて、生田神社の福田さんにも事情をきいてみたいと考えている。

（作家）

大阪・高麗橋二丁目 ㊤2106



去叫過提

会 期

1961 10 14 28 W

領事館大の清境しやうをいふがやうに
 gauge を大の中へ移つて、in a paper (型)に
 流してやる。とておおいしく思つてゐる
 ところ。たゞこれをお金を書く所までがやりかた。
 紙の塊つをお金を申上げるとかゝる。
 といふ譯きの後裏をさかへて流して
 くる。

五 搖 功

Tausend Dank für Ihre große Güte

Heuglich Ihr ergebener
Albert Schweitzer

創業 明治三十年



月 堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 ③ 695・696



あなたに
おすすめする
ネクタイの
かずかず



ネクタイの
元町バザー

神戸×元町

DIAMOND



タイヤ
メキシコオパール
オパール
猫目石スターサファイヤ
エメラルド・ルビー・サファイヤ
ヒスイ

世界の
宝石を
結集した

宝石輸入商・宝飾店

タジマ

神戸・元町2丁目

TEL ③ 0387・2552